

## マインドリーディング能力発達の日英文化間比較

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 弘美, TSUJI, Hiromi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4379">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4379</a>

## マインドリーディング能力発達の日英文化間比較

学芸学部 心理学科 辻 弘美

他者の内面を推論する能力は、「マインドリーディング」や「心の理論」として認知科学や発達科学領域で広く研究されている。「マインドリーディング」能力は、コミュニケーションの要素として、同一コミュニティのみならずグローバル社会において重要なスキルである。よって、その発達や文化間の差異に関する新たな研究知見を構築していくことが求められている。日本人を対象に心の理論の発達を予測する心的状態語の役割について明らかになってきた(Tsui, 2011)。この関係性については欧米の研究結果と類似しているものの、縦断的な「心の理論」発達の時期を間接的に比較した研究や介入研究の結果を総合的に考察すると、日本語話者は、英語話者の発達に比べて獲得時期に遅れがみられるといえる(Tsui, 2015)。しかしながら、日本語話者の発達時期を議論するには、現在のところ文化間の直接比較ができていないという限界がある。

また、「心の理論」の発達を検討した先行研究では、定性的な側面に注目した課題が用いられ、定量的な測定を幼児期の子どもに適応した研究は行なわれていない。一方成人を対象とした研究では、文化的差異として個人主義文化と集団主義文化の比較を行なったところ、Peter Mitchell氏らをはじめとする研究グループは、日本のような集団主義文化の成人の方が、個人主義文化の成人より他者の内面をより正確に読み取ることができる結果を報告している(Valanides et al., 2017)。このように、もし日本の成人が個人主義文化の成人より優れたマインドリーディング力を備えているならば、英語圏の子どもに比べてゆっくりと「心の理論」を獲得するとされる日本の幼児は、どのような発達過程を遂げるのであろうか。本研究は、これらの問題を明らかにするため①成人向けに近年開発された他者の心を読む能力を定量測定する課題を幼児期以降の対象者に適応する条件の検討と②日本と英国における心を読む能力の幼児と成人の発達変化の比較検討を行なった。

本研究は①ターゲット人物刺激作成②ターゲット人物のマインドリーディング課題から構成された。①では、16名(性別2×文化2)の成人がそれぞれ4つ(喜び、悲しみ、怒り、感謝)のエピソード記憶想起場面を15秒間録画し、刺激とした。②では、6歳の幼児52名(日本33名、英国18名)と若年成人51名(日本31名、英国20名)がマインドリーディング課題を遂行した。課題は、ターゲット人物の感情に関するエピソード記憶想起動画再生後、その人物がどの感情に関する出来事を想起しているか4択で回答を求めた。

全ての回答は、信号検出理論を用いてHitとFalse Alarmの比 $d'$ を算出し分析を行った。年齢グループ(幼児・成人)×文化(英国・日本)×ターゲット感情(喜び・悲しみ・怒り・感謝)による分散分析を行った。感情の主効果： $F(3, 294) = 62.25, p < .001$ 、年齢の主効果： $F(1, 98) = 5.92, p = .023$  要因の交互作用： $F(3, 294) = 3.53, p = .02$ が有意であった。ターゲット感情別の事後分析では、怒りと悲しみにおいては、年齢の主効果が有意で、幼児が成人よりもより正確に判断していた。一方、喜びと感謝については交互作用のみ有意であり、どちらも英国の幼児が英国成人と日本の幼児より正確に判断していること、日本成人が英国成人や日本幼児より正確に判断していることが明らかとなりこれらは、これまでの先行研究の傾向を支持しているといえよう。ポジティブ感情とネガティブ感情ごとに発達と文化によるマインドリーディングの差異の傾向は似ていたものの、ネガティブ感情において、なぜ幼児のマインドリーディングが大人よりも正確であったか、また、ポジティブ感情においては、日本の幼児の正確さが英国の幼児よりも有意に低下するのかの理由について、今後明らかにしていく必要がある。